

ベルクソンとハイデガーの時間論

中 富 清 和

一 研究視点の転換

——フッサールからベルクソンへ——

ハイデガーの時間論は、その哲学的生成から言ってフッサールの現象学的時間論に影響を受けていることは周知のことである。フッサールは時間を、現在、過去、未来の三つの位相に分け、それぞれに知覚 (Wahrnehmung)、把持 (Retention)、予期 (Pro-tention) を対応させる。そして時間とは過去の位相を把持しながら、現在に生き、さらにこの現在の位相を過去につけ加えながら来るべき未来へ向う意識の流れ、意識流 (Bewusstseinsflu) とした。この意識は体験流として内在的客体を持ち、これは常にある持続せるものとして現われてくる。そして、それぞれの体験はそれぞれの時間的位相をもって現われては消え交替して流れて行く。

こうした体験は一つの体験流に属し、言わば絶対的意識流の中に現われて来る。その体験流は無限の統一であり、その流れの形式は純粹自我の一切の体験を包み込む形式である。

こうしたフッサールの時間論に対し、ハイデガーは時間を意識流に還元しないが、時間を既在 (Gegenwart)、現在 (Gegenwart)、将来 (Zukunft) の三契機から構成させ (これはフッサールの時間論に対応している)、既在的に現成する将来 (Gegenwart gegenwärtigende Zukunft) としての統一な現象を時間性 (Zeitlichkeit) と名付ける。言わば過去、現在を保持しつつ将来、未来へ志向、投企すること、これがハイデガーの時間である。こうした過去、現在の保持、そして将来、未来への志向はフッサールとハイデガーの時間論において共通する所、いやハイデガーのフッサールからの影響と言えよう。

しかしハイデガーの時間論がフッサールのそれに基づくとする見解は、伝統的ではあるが現象学という限定された視座からのものである。『存在と時間』にはアリストテレス、ヘーゲル、ベルクソンなど何人かの哲学者の時間論が論及されていることから、現象学からのみの考察では不十分と言わざるをえない。しかもフッサールの時間論は『内的時間意識の現象学講義』⁽¹⁾に述べられているにしても、後にフッサールは愛弟子のインガルデンに「そのような未熟なテキストを公刊しても意味がない」ことを語っていることから、未完成であったと思われる。とすればハイデガーはフッサール以外の哲学者の時間論を相当に参考に行っているはずである。

ところで、フッサールの時間論を研究してみると、特に『内的時間意識の現象学講義』を読むと誰もが、フッサールの体験的意識流とベルクソンの純粹持続 (durée pure) が類似していると思うであろう。何よりもそれは、フッサール自身が認めていることである。例えば、フッサールはインガルデンから純粹持続の説明を聞いて「全く、まるで私がベルクソンであるかのようだ。Das ist ganz so, als ob ich Bergson wäre.」と語っている。また、こうした直撃的な驚きに先立って、フッサールは根源的な時間構成的意識に関するインガルデンの質問に、この領域における純粹持続との類似性を認め答えている。これ以後、フッサールとインガルデンとの哲学的対話が深まったのである。

一般的にフッサールとベルクソンは同時代に活躍しながら、相互に影響し合うことなく独自に哲学を形成したことになっているが、実はインガルデンによつて間接的に橋渡しされていたのである。従つてインガルデンがベルクソンを研究し始め、フッサールと対話を始めた一九一四年以降、フッサールにおけるベルクソンからの影響を認めるべきであろう。とすれば一九一六年にフッサールがフライブルク大学に転任し、ハイデガーと親密な交渉が始まるのは一九一九年頃とされるから、ハイデガーがフッサールの現象学に慣れ親しんだ時には、フッサールはベルクソンを知っていたことになる。率直に言えば、ベルクソンから影響を受けていたフッサールにハイデガーは接したのである。既にベルクソンの純粹持続とフッサールの意識流が近いものであることは記したが、『内的時間意識の現象学講義』を編集したハイデガーがベルクソンの『時間と自由』を読んだとしたら、その類似性に驚いたのではないか。そして時間論としてはフッサールのそれが未完のものであると思つたであろう。それに対して『時間と自由』はベルクソン自身によるものであること、また内容的にも心理学を援用して純粹の純粹性を証明していることから理解しやすい。それで純粹持続と物理的時間、真の自我と表層的自我などの二区分法をハイデガーは参考に行っているように思われる。ここにベルクソンとハイデガーの時間論を比較考察する必要性が生じてくる。両者の関係は従来、ほとんど考察されていないが、吟味してみると共通

する点がかかり見受けられる。この論考は、フッサールよりもベルクソンの視点からハイデガーを考究するものである。

二 ベルクソンとハイデガーの時間論

—その共通性、影響

(一)人間の本质としての時間

両者の時間論において共通する第一の点は、両者の主著『時間と自由』、『存在と時間』に象徴されるように両者とも時間を哲学の中心課題としていることである。ベルクソンの『時間と自由』の原著は『意識に直接与えられているものについての試論』(Essai sur les données immédiates de la conscience, 1889)であるが、『時間と自由』のタイトルはポグソンの英訳に対して与えたものである。(この「直接与えられているもの」(données immédiates)とは認識の無媒介の対象であり、これ以上分析できず論理的に異論の余地のないもの、純粹持続のことである。純粹持続とは理論的反省を停止した意識がメロディのように相互に浸透し、有機化する意識状態であり、先行する意識と現在の意識が区別なく融合する自我意識の流れ、在り方である。これをベルクソンは根源的自我(moi fondamental)、真の自我、時間としたのである。従ってベルクソンの哲学とは持続、時間の哲学である。これと同様、ハイデガーも時間を哲学の中心問題に据える。ハイデガーにおいて時間は、死を臨みつつ決意して存在する自己の在り方、未来へ

の志向、身構えである。それは人間存在の主体的かつ本質的な在り方を表わしているが、これはベルクソンの持続、時間論にも妥当する。ベルクソンにおいて人間は日常性、実践的生活に慣れ埋没し、純粹持続の状態を忘れてゐる。この日常性への埋没は、ハイデガーで言えば、世界内存在(In-der-Welt-sein)としての世間的自己である。こうした埋没から脱することが真の在り方、生き方であり、ベルクソンで言うところの、持続の相の下における根源的自我であり、ハイデガーでは死を自覚する本来的自己(eigentliches Selbst)である。本来的自己は自己の有限性を自覚している在り方であり、それは将来、未来へ向かつて自己を志向、投企している。これをハイデガーは時間性と呼んでいる。このようにベルクソンもハイデガーも時間を人間の主体的在り方、あるいは本質的存在そのものとして認めていることがわかる。これが両者の時間論の第一に共通する点である。

(二)時間の二区分

共通する第二点は時間の二区分である。ベルクソンは純粹持続を真の時間とし、それに対して数えられ空間化された時間を等質的時間(tempus homogene)とした。こうした二分法はハイデガーも用いている。真の時間を根源的時間(ursprungliche Zeit)とし、この時間から公開的時間(öffentliche Zeit)・世界時間(Weltzeit)・通俗的時間(vulgäre Zeit)が派生する。ハイデガーによれば現在存在は意図せずしてこの世界に投げ出された(被投性)存在であ

り、この日常的世界に生きてゐる。日常生活を営んでゐる我々は、それぞれの仕事、作業に氣を奪われ、これらを達成するために時間を使つて生きてゐる。その時、我々は常に「今」を基準にして時間を考える。「かつては (damals)」「その時には (dann)」これらは今を基準にして考えられたものであり、こうして時の流れに一瞬間の区切りをつけることを日付可能性 (Datierbarkeit) というが、これは世界内の存在者と出会う時に行われ、さらに拡がって行く。この作用が太陽の動き、日照に基づいて公衆に公にされた場合、公開的時間となる。そして我々は公開的時間から便宜的に時計を使用し、これに従つて仕事をしている。この時、我が時計を氣にするのは、常に次は何をしようかと心に意図を抱いているからであり、何かを為すために時を氣にしているのである。時計を見るのは次に何かをするためであり、「今」という時間は、ゝするための区切りなのである。こうした世界内の存在者との連関において、ゝするための時をハイデガーは世界時間と名付ける。こうした世界時間がさらに平板化され、有意義性が隠蔽されると通俗的時間となる。この通俗的時間が物理学の時間であり、ベルクソンの等質的時間である。物理学の時間は時計に表わされる時間であり、常にグラフ、数値化される。それは一回限りで継起する持続を等質化、空間化することであり、日常生活の時間である。ベルクソンは純粹持続からの下降として等質、日常的時間を導き出すが、ハイデガーも同様に根源的時間から通俗的、日常

的時間を導出する。こうした時間の二区分法はベルクソンが先に行つてゐるわけで、ハイデガーは参考にしてゐるように思われる。無論、フッサールも現象学的時間と物理学的時間の相違を述べてはいるが、ベルクソンほど具体的に明確にしてゐるわけではない。しかもフッサールの時間論は未完成であつた。とすれば、この二元的区別はフッサールよりもベルクソンによると思われる。

また時間の二区分に対応して自我の二様相も対応する。ベルクソンは持続の相における自我を眞的自我 (根源的自我) とし、日常生活で持続を忘れた自我を第二の自我 (表層的自我 *not subject being*) とする。これに対しハイデガーは自己の実存を自覚する本来的自己と、実存を見失ひ日常生活に埋没してゐる非本来的自己 (*uneigentliches Selbst*) を区別する。時間と共に、自我のあり方をも二元的に区別するのは偶然であろうか。ここにもハイデガーにおけるベルクソンからの影響が見受けられる。次に時間の方向性、未来への志向について語つてみる。

(三) 未来への志向と運動図式

ハイデガーにおいて時間とは未来への志向、投企、つまり我々の未来への決意した身構え、姿勢をあらわすものであつた。従つてハイデガーの時間はベルクソンの時間のように実在にはなり得ない。それは実在すると言へば実在するし、しないと言へばしない。そもそも我々の未来への決意、身構え、姿勢なのであるから実在という概念は妥当しないのである。とすればこうした未来への志

向、姿勢を意味するハイデガーの時間は、この点においてベルクソンのそれとは性質を異にすることがわかる。ではベルクソンにおいてはハイデガーの「未来への志向」という考えは存在しないのだろうか。確かにベルクソンはハイデガーのように死という有限性で人間の存在を限定せしめない。我々は実在、宇宙の持続、実在の流れを汲むものであるから、個としての生命は絶えても実在として宇宙の原理に還帰するのである。我々の生命はハイデガーのように無に帰することなく、実在から由来して実在へと帰るのである。とすれば非決定的な持続の流れを汲むものとして我々は本質的に自由であり、未来へと開かれていく。未来への実在へと我々は流れ変化生成しているのである。ではこうした我々の志向を身体レベルで表わしているものは何か。それは運動図式 (schème moteur) である。

運動図式とは『物質と記憶』 (*Matière et mémoire*, 1896) に記されている我々の身体運動を方向づける枠組であり、運動に際して常に先行する身体の見えざる生理学的装置である。これによって我々は複雑な運動も一気に行えるし、スムーズに行動できる。この概念は心理学、生理学的であって実存哲学とは無関係のように思われる。しかしこの運動図式は決して生理学上の仮定ではなく、我々の精神と身体結び目、融合点に存在する重要な機能である。これを参考にしてメルロ・ポンティは後に、『知覚の現象学』 (*Phénoménologie de la perception*, 1945) の中で身体図式 (schéma

corporel) の理論を展開したことは説明を要しないであろう。私⁽⁷⁾が思うに、運動図式はベルクソンが身体、精神が単に過去、現在に存在しているのではなく、常に未来への潜在的志向を整えつつ行動していることを表わそうとしたものである。従って我々は未来へ向って身構えているのであって、ハイデガー的に言えば、時間⁽⁸⁾は未来から到来するのではないか。ハイデガーは『存在と時間』においてベルクソンの時間論は依然として過去↓現在↓未来へと流れる伝統的、通俗的時間論であるとして批判しているが、しかし、ハイデガーは運動図式について言及していない。もし運動図式を知っていたならばベルクソンも未来への志向として時間を考えていたことがわかるはずである。従ってベルクソンの時間論は過去を孕みつつ未来へと膨張する持続の流れであるが、しかしこのことだけで過去↓現在↓未来という伝統的時間論の中に押し込めてしまふのは性急と思われる。ハイデガーは運動図式に気づいていなかったと思われるが、実はこの図式に未来への志向というハイデガーの時間論と重なるべき考え方が織り込まれているのである。逆に、もしハイデガーがこの図式を知っていたならば、時間の未来からの到来は一般的にフッサールの時間論に基づくこととされているが、この定説が覆されることになる。ここで言えることは、ハイデガーが思う以上にベルクソンは先の事を考えていたことである。そしてハイデガーはその時間論において、言及しただけであって現象学的時間論だけではなく、ベルクソンの時間

論をかなり受容していると思われる。

以上、ベルクソンとハイデガーの時間論の共通点、及びハイデガーのベルクソンからの影響を指摘したが、次にこの両者の相違を明確にしたい。

三 ベルクソンとハイデガーの

時間論における相違点

両者の相違の第一は、ハイデガーは死への自覚、投企を旨とし、死、終局への自覚的姿勢を時間とするのに対し、ベルクソンにはこうした死の自覚「死学」がない。ハイデガーによれば人間は何故という理由なくしてこの世界に投げ出されたのであり、どこから来てどこへ行くかは問われていない。あくまでもこの世界に留まるものである。ベルクソンのように実在から来て実在へ向かうということはない。ハイデガーにおける真の時間は死、終末の自覚に基づくので、ベルクソンの持続における真の自我も、死を自覚していなければ非本来的の自己となり、通俗的時間の中にあることになる。逆にベルクソンからは、死を自覚していても純粹持続にあつて生に溢れていなければ真の時間、自我とは言えない。このように死学があるかないかの違いが両者の相違の第一である。

第二は、ハイデガーは『存在と時間』において実存論的分析論を展開し、実存 (Existenz) の考察を行っているが、ベルクソンには実在の概念はあつても実存の概念はない。というのはベルク

ソンはスペンサーの進化論や心理学、生理学、生物学などの影響の下に出発するので、有限性、負い目、不安を呉わすキリスト教神学からの影響を受けていないからである。彼の立場は「創造的進化」(Evolution creative, 1907) からわかるように人類進化に立つ。実存の代わりにベルクソンでは実在が問題になるが、実在の流れを汲む人類の生成発展のためには、人間の原罪、負い目、不安が必要がない。我々人類の前途には大きな希望、可能性が開かれているのである。ベルクソンの持続の哲学は、実在、生命、宇宙の形而上学となる。ベルクソンの形而上学は「時間↓実在↓創造」であるのに対し、ハイデガーのそれは「時間↓実存↓死(終末)」である。ハイデガーでは死即無となり哲学の根本問題となるが、ベルクソンでは無は代置、空虚な概念にすぎない。死は「生の躍進」(élan vital) によつて克服されるのである。このように、ハイデガーは「死への存在」(Sein zum Tode) として実存を対象とするのに対し、ベルクソンにはこのような実存概念がなく、代わりに実在が対象となっている。これが第二の相違である。

第三の相違は方法論的相違である。言うまでもなくベルクソンは直観的方法 (méthode intuitive) を取るが、ハイデガーは現象学である。もつともハイデガーはフッサールの現象学を發展させて、現象学的存在論を展開する。現象学の課題は「事象そのものへ」(Zu den Sachen selbst) と還帰し、我々の純粹意識に現われてくる事象、世界を厳密に記述し、そこから学問的基礎付けを

行うことである。ハイデガーもこの方法によって現存在の実存論的分析論を行っている。そこで中心になっているのは分析、記述である。これに対してベルクソンの方法は直観的方法であるが、これは対象、実在との合一、体験的認識であり、この方法では実在が記述し尽くせないのである。ここに現象字と直観的方法の決定的な差異が存在する。従って死への自覚的在り方を時間とするハイデガーの時間論は記述しうるが、体験的認識、合一を目指すベルクソンの純粹持続の時間論は記述し尽くせないのである。この違いは言葉に対する見解の相違でもある。ベルクソンにおいて言葉は実在の影、殻で、実在の眞の姿を表わすものではない。しかしハイデガーにおいて言葉は「存在そのもの」を表わし、後期においては「存在の家」になる。こうした相違は方法論の違いに基づくのであり、この相違を知ることがベルクソンとハイデガーの哲学を解明して行く上で有意義であらう。

四 結 論

以上、ベルクソンとハイデガーの時間論を考察してきたが、これによって両者の類似性、ハイデガーのベルクソンからの影響が理解できたと思われる。私も最初は両者の交差点を見出せなかったが、『存在と時間』を読んだ時、その時間論の二元論的構成において、すぐにベルクソンの時間論が閃いたのである。さらにハイデガーのルーツを探ってフッサールを読んだ時、ベルクソンの時

間論と似ているので驚いてしまった。しかもフッサールがインガルデンを通してベルクソンを知ったことは二重の驚きであった。ベルクソンとフッサールは概念や言葉が違っても、その本質を目指すベクトルは同じだったのでないか。従ってハイデガーがベルクソンに対して批判的であるにしても、フッサールの中から純粹持続を発見し、それから影響を受けたとしても不思議ではない。とすれば、ベルクソンの時間論の再評価が必要と思われる。

- (1) Edmund Husserl, *Vorlesungen zur Phänomenologie des inneren Zeitbewusstseins*, Max Niemeyer Verlag, 1928. 無論、私はこの著作におけるシェームスからの影響を忘れるものではない。
 - (2) Roman Ingarden (1893-1970) ポーランドの現象学派の哲学者。ゲッティンゲン、フライブルクでフッサールに学び彼の優れた弟子となった。一九一八年にフライブルク大学で学位を得る。論文は「Intuition und Intellekt bei Henri Bergson」
 - (3) Edmund Husserl, *Briefe an Roman Ingarden*, Herausgegeben von Roman Ingarden, Martinus Nijhoff, 1968, p. 154.
 - (4) *ibid.*, p. 121.
 - (5) *ibid.*, pp. 115-116.
 - (6) ハイデガー『存在と時間』原術、渡辺二郎訳、中央公論社、世界の名著、六六四―六六五ページ。
 - (7) 拙稿「メルロ・ポンティの世界内存在の論証をめぐる」(日本倫理学会、昭和六十二年第三八回大会、研究発表要旨)
- 尚、『Sein und Zeit』の原典は、Max Niemeyer Verlag, Tübingen, 1973 を使用。注は必要最小限に留めた。
- (なかとみ・きよかず、哲学、千葉市立稲毛高等学校教諭)